

はなぶんがく

59.1.1
1984.1.
No.52

(連絡先) 津田 美

(編集人) 葛西よう子

今「母性」について

— 葛西よう子 —

新しい年をむかえ、昨年一年間の私達女性と
とりまく種々の問題を考えるみると、大抵は二つ
のポイントが浮かび上がる。一つは「男女雇用平等法」
を中心とする女性の職場進出の問題であり、も
う一つは「優性保護法」をめぐっての中絶の可否
に関するものがある。その他環境問題、母乳
主義、家庭の崩壊、老人福祉など、今日の社
会が抱えている問題すべてが背後に「母性」と
どうもかかっている。「母性」の位置付けの問
題が深く横たわっていると思う。私は、母性とは母
性という言葉をまこと肯筋の中心に置くと、母性
とは体中の緊張している、口をわけて国には女性の
問題を家や母性に封じこめようとする時代が
あった事とよく知ることがあり、かつそれは又心構
的に(制度的にはなく)来たる過渡期のものと
なるし、もう一つは、事も身はしみて知ること
になるのである。現在、母性や「母性」と強調する
事による制度的にも女性を封じこめようとする
動きが年々高まっている。その最大のものは

のが「優性保護法」を廃止しようとする動きであ
ろう。昨年の間に私の目にふれた新聞、雑誌類

の中から心に残ったものを御紹介したい。

「社会運動」45号(社会運動研究センター刊 1983)

の河野誠一の「母性主義を批判する」より

「母性主義」というのは女性もつ能力のうち母性

に生命の生産を強調する立場です。これが強化さ

れると「男は賃労働、女は家事育児」という性別

役割分業のもとに、女性を母性とみなし、二つの二

つに分業する。これに対して性別役割分業を是

正し、男女を問わず人間性の全面的な開花を

もつめるのがフェミニズムです。

— エレンケイ、平塚らいてう、高群逸枝などの婦人

運動史上、重要な位置にある人々も母性主義

的要素を持っています。がフェミニズムが母性主義を

推進したのも在史上の事実です。前者の場合

有産財などの生活資料の生産(男が主導権

を持する)が個値的に上位に

おかれている社会にたいし、生命

の生産(人類という種の存続)の



復権を要求するものですが、後者の場合は男権主義の強化が背景にあります。母性をどのように位置づけるかは、今日も未解決の課題であると思われれます。

—家事労働をやらせて母性主義と女性の解放のせめ
ぎあい^①が起る領域が生命の生産（妊娠・分娩・授乳
離乳後の育児）です。生物学的に生まれる「母性機
能」は妊娠・分娩・授乳だけですか？「母性期間」は女性
の一生のうちごくわずかの部分を占めるにすぎません。又
産まないことを選択する女性も当然います。ですから「母
性」をもて女性の一生を特徴づけることは生物学的にも
明うかに無理があります。

一 家事育児を通じて女性の役割として生物学的に規定されてゐるのは妊娠・出産・乳を与へることに限定され
たものである。それ以外の性的分業はすべて生物学的な根
拠のない文化的なものである。ユルカント・ミードは始めと
する文化人類学の研究は男女の気質や役割が自然
的なものとしてより文化の力によつてつくられる度合いが
大きいことを示しています。

一 離乳會に始まる會事の用意は男女之分担する事
が出来ます。そのためには育児時間や家事時間の保



一 優性保護法の中に除外規定項目を五つ作る。その
中五番目が経済的理由です。この五項目にある理由で
堕した場合には除外規定ですから堕胎罪は連動させ
ません。とそう言う言方ごやう未だわけです
今三百万近い人が堕してゐる。とわかれてゐますがその96%が
経済的理由で堕してゐるといふのが厚生省の発表で出て
きてゐるわけですよ

一私達の反対とするのは、今経済的に豊かではない、やな
いか、そんなのに経済的理由をとる、はげしくん、と言う
ではちがひです。墮胎罪、そのものをなくす、という運動を
進め、さしてやるわけです。つまり産むの産まぬか、とソコにと
つて國家がああせい、こうせいと言ふ時には必ず國家にと
る有用とつのが出てくるわけですから、産むの産まぬか
は男の人と女の人が決めることであつて、國家が命令すべき
ことではない、というわけです。

「私たちが産みの産まぬのは、その権利である」といふ言ひをするのは國家に對して言つてゐるわけだ。自分達の産み出しに攻撃を仕掛けられてゐるときに、個人權利的國家權力の戦ひの中に言ふる言葉であるわけだ。――今一歩だれもが容易に舞ふもゐるといふことでは決し

は、そんやマン
たちは
いま？

―― 町田さんの場合――

この間、複雑思考を繰り返す体験をもちやうた
戦場の人が出産休暇に入らんで、私、女が男にひ
まふなと思いつく男達にもさそこの、ネーグの前に
たむろしてたので「ねえ、わけない？」とさそうたらサ……
「いえ、ぼくしない」とみーんな妙にしり込みするのね
「あんたもなの」と年下、三児の父親をにらんだら……
「うーん、そうですぬえ」と三児もすまなそうな顔
「一晩まんじりもしないで（？）（『筆記者注』）考えたら
あ、と思長、そう母性崇拜」なのよ、日本男性の
弱い部分がこれ、
「何日かたて確認したら……」

られしと云ふ。『そーなんです。昔男として生んでくたさるの
 に、女だ男だなんてカゲは、とそもとそもぼろにとて。
 出産は神聖な行為なのですよ。』と、
 なる程、やはり出産と云ふ事は、男にとては、重大な行為
 なんだな、するとこのことと、優生保護法とのつながりは……
 また保護、扱す主、主張とする彼等の考へる、雇用平等
 法とのつながりは……は、たまた「女は家庭に帰れ」
 への反理論作りは……云々。しばらく私の複雑思
 考は繞りてあります。なか、生まれたのは女の子
 『男の子に予想が、多い中での、私の反骨のカゲ。うまく
 当たりまゐた。おめ、と、うー、赤ちゃん！』

「餐運動」依特集日本的母性高し
公南合評会
五四年三月四日(土)午後 6.30 ~ 9.00
執筆者一同出席

見られぬ地図　ニや何じや々と
お思ひですわ　ばうん　やゝ（
送られて来た東京のブイラの活動
予言です。世の中には　ミウロウ僅しも
あるのガザ　と云ふと　お知らせ迄